

いのちの言葉2026年8月

**「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」
(ルカによる福音書1・46-47)**

ルカは、その福音書の第1章において、新約聖書の中で唯一、マリアとエリサベトという二人の女性が主役となる場面を描いています。

エリサベトは、ナザレから約150キロメートル離れた、エルサレム近郊の村に住んでいました。イエスの母となるという天使のお告げ(ルカ1・26-38)を受け取った直後、マリアはこの長い旅に出ます。その道のりの詳細はわかりませんが、彼女が急いで山里へ向かったことだけはわかっています。しかし、なぜ彼女はそこまで行こうとしたのでしょうか。

マリアは、自分と同じように神から子を授かるという恵みを受けた人にこの喜びを分かち合い、妊娠の最後の数カ月間、彼女のそばにいて支えるために向かったのです。これは二人の女性、そして「あり得ない」はずの子を宿す二つの母性についての物語です。この経験を分かち合うために、マリア以上にエリサベトを理解できる人がいるのでしょうか。この出会いから、「マニフィカト」の賛歌が湧(わ)き出るのはです。

わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。¹

マルティン・ルターは「マニフィカト」について次のように記しています。

「マリアのこの言葉は、深い愛と喜びを表している。彼女の魂も、全存在も、霊のうちに高められる様子を示している。マリアは『私は』神をあがめる、とは言わず、『私の魂は』神をあがめる、と言う。(なぜなら、喜びをもって神を讃美するということは人間の行為ではないからである。それは……ただ神のお働きによるものである²。)

あたかも『私の全存在、感じることをすべては、神の愛に支えられている』と言っているかのようだ。」³

「あがめる、賛美する(magnificare)」つまり、相手を「偉大なものとする」という言葉は、神が私たちの想像以上に偉大であることを発見し、そこから生まれる喜びを表しています。この喜びには、深い謙虚さと、感謝の気持ちが響き合っています。

エルメス・ロンキ(聖母のしもべ会の司祭で神学者)の言葉を借りれば「『マニフィカト』はマリアの福音であり、あらゆる世代に届く彼女の善き知らせ」です。ナザレの少女は十回にわたり、「主がなさったのです……」と繰り返します⁴。まるで新たな十戒、この世の論理を覆す新しい十の戒めのようなものです。

ここでおのずと問いかけが生まれます。私たちは、日々の生活や祈りの中で、神がなさることへの驚きや感嘆の気持ちを、持ち続けているのでしょうか。新たなことやその驚きに対して心を開かず、驚きを失ってしまえば、信仰はくたびれた祈りとなり、次第にその灯を消し、単なる

社会的習慣となってしまうでしょう⁵。

わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

マリアの賛歌は、単なる内省的な賛美の祈りではなく、聖書の箇所を絶えず引用することの特徴とする預言的な賛美であり⁶、神のみ心に従って歴史が向かうべき方向を示しています。神を賛美するということは、弱き人々の側に立ち、世界は変わり得るし、変わらなければならないと信じることを意味します。

この賛歌の言葉は、私たち一人ひとりの個人的な経験から普遍的な経験へ、そして今この瞬間から、福音による社会的革命が切り開く「新しい天と新しい地」に至るまで、私たちの個人的な歴史や共同体の歴史における神の救いのみ業を理解するよう、私たちを招いています。

わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

この言葉は、私たちの人生をも、「生きた賛美」とし、日々「偉大なみ業」を認めるよう招きます。「神は私たちをお忘れにならず、その憐れみは代々限りなく、その正義と愛に満ちた民国は、私たちの間にすでに実現しつつあります」と歌うマリアの声に、私たちの声を合わせるようにといざないます。

キアラ・ルービックは、マリアの賛歌にある革命的な側面を理解し、若者たちにこう書いています。「『マニフィカト』を読んでみてください。そこには、キリスト教社会教義の最初にして最も力強い1ページを見出すでしょう。一体誰が、いつ、それを完全に実現するのでしょうか。」⁷

この問いかけは今も続き、私たちを駆り立てます。神の介入の働きは、心の奥底に留めておくのではなく、人間関係や共同体の生き方、そして後の世代に続く歩みの中で現れてゆくべきもののなのです。

パトリツィア・マッツォーラと「いのちの言葉」編纂チーム

いのちの言葉は聖書の言葉を黙想し、生活の中で実践するための助けとして、書かれたものです。

1. 日本聖書協会 新共同訳

2. 訳者注：抜粋箇所の理解を助けるために、聖文舎『ルター著作集4』マグニフィカート・マリアの讃歌講解より追記

3. マルティン・ルター『マグニフィカート・マリアの讃歌講解』1520年

4. エルメス・ロンキ神父、Order of Servants of Mary（聖母の僕会／サーヴァイト会）「マニフィカト、未来への窓」アヴェニーレ紙、2021年8月12日

5. （参照）教皇フランシスコ、アンジェラス、聖ペトロ広場、ローマ、2021年7月4日

6. （参照）ジェラルド・ロッセ「ルカの福音書」チッタ・ノーバ、1992年、p.69

7. 「Detti Gen

（ジェンへの言葉、未邦訳）」チッタ・ノーバ、ローマ、1969年、p.57（第四版、1974年）